

女三の宮の乳母をめぐる

吉 海 直 人

【要旨】 女三の宮には三人の乳母と一人の乳母子が付けられているが、それぞれ別個の役割分担を担っていた。最も特徴的なことは、女三の宮の侍従の乳母と柏木の乳母が姉妹として設定されており、そのことが女三の宮と柏木の密通事件の伏線になっていることである。また柏木の乳母子が血縁的に八の宮と繋がることで、薫に出生の秘密を伝える適任者として設定されていることも明らかになった。これは乳母の論理に加えて、血縁の論理を複合することで、人物関係を合理化しているのである。

一、女三の宮の乳母の研究史

『源氏物語』に登場している乳母の中で、光源氏・夕顔・紫の上・明石姫君・夕霧・女三の宮・浮舟の乳母は、比較的重要

な役割を担っていると思われる。また惟光・右近・小侍従といった乳母子の活躍も看過できない。そこで前者『平安朝の乳母達』⁽¹⁾において、これらの乳母・乳母子を総合的に論じてみたわけだが、女三の宮の乳母に関しては、既にその重要性が十分認識されていることもあって、再検討することなくそのまま放置してしまった。しかしながら女三の宮の乳母をきちんと論じなければ、私の乳母論も完結しないようなので、今回あらためて考察してみることにした次第である。

女三の宮の乳母については、既に久保重氏が非常に重厚な御論を発表されている⁽²⁾。また藤本勝義氏も兄の左中弁と絡めて詳細に論じられている⁽³⁾。特に久保氏の御論は出色のできばえであり、スケールの大きさのみならず、その臨場感あふれる文体に

は思わず引き込まれてしまう。私などの力量では到底反論などできそうもないが、あくまで乳母論の視線からいささか私見を述べさせていただきたい。

なお、女三の宮は若菜上巻に至って初めて登場する人物であるが、その女三の宮の乳母にしても、同様に若菜上巻が初出であった。朱雀帝讓位という大きなで政治的動向の中で、女三の宮の婿選びが行われることになり、左中弁の妹がにわかに脚光を浴びている。

続いて降嫁後に、紫の上とのパイプ役として中納言の乳母が登場している。さらに若菜下巻において侍従の乳母が登場しているが、彼女の場合は既に女三の宮降嫁が行われた後であるから、必ずしも婿選びと連動しての登場ではなかった。むしろ侍従の乳母の場合は、その娘である小侍従（乳主）の方がずっと重要であり、女三の宮と柏木との密通を仲介する人物として、非常に大きな役割を担っている（逆に乳母は不在となる）。

柏木と女三の宮の密通は源氏の知るところとなり、柏木は源氏に睨まれたことが元で病死してしまふ。女三の宮も出家してしまひ、この一件はこれで落着いたかに見える。しかし続編の橘姫巻において、柏木の乳母子である弁の尼が唐突に登場する

ことで再提起され、薫は自らの出生の秘密を知らされることになる。

以上のように女三の宮の乳母・乳母子に関しては、

- 一、女三の宮の婿選び ↓左中弁の妹
- 二、女三の宮と柏木の密通 ↓小侍従
- 三、薫の出生の秘密暴露 ↓弁の尼

の三つに区分して考察することが適当であろう。弁の尼は女三の宮の乳母子ではないが、血縁的に繋がっていることに注目してみた。

二、朱雀院の後宮

まず、土壌となっている朱雀帝後宮の構成を展望しておきたい。というのも、「女御、更衣あまたさぶらひたまひける」（新編全集桐壺巻17頁）桐壺帝の後宮に比べて、続く朱雀帝の後宮は慘憺たる状態だったと思われるからである。将来の后がねとされていた左大臣の娘葵の上と、右大臣の娘（弘徽殿の妹）朧月夜の入内が、光源氏によって阻害されたのが第一の原因である。左大臣は葵の上の東宮（朱雀院）入内よりも、臣籍に降下した源氏の添臥となることを自ら選択した。朧月夜は朱雀帝入

内直前に源氏と結ばれてしまい、そのために女御ではなく尚侍としての出仕となってしまうからである。

これは朱雀帝と源氏の隠れた王権争いの喩とも読める。そのため朱雀帝の御代には誰も立后できなかった。もちろん朱雀帝の後宮には、それ以外にも麗景殿女御（右大臣の孫）・承香殿女御（髭黒の妹）・一条御息所などの存在も描かれている。

政権の安泰を願う右大臣側としては、朧月夜か麗景殿女御腹の皇子を立太子させたかったのであろうが、両女性に皇子は誕生せず、そのため次期政権はたまたま皇子を出産した承香殿女御の兄髭黒へと簡単に移ってしまう。

もう一人、女三の宮の母たる藤壺女御がやや唐突に紹介されている。朱雀帝は父桐壺帝後宮を模倣するかのごとく、先帝の皇女を入内させているのである。あるいは藤壺自身、年齢的に考えても朱雀帝への入内が順当で、それを桐壺帝が横取りしたのかもしれない（その方が「長恨歌」の構成とも一致する）。その代用として藤壺女御が入内しているのである。しかし后腹ならぬ更衣腹の皇女とあっては、かえって貧相な感は否めない。

ただし藤壺女御への朱雀帝の寵愛が深かったことは、
母女御の、人よりはまさりて時めきたまひしに、みないど

女三の宮の乳母をめぐって

みかはしたまひしほど、御仲らひどもえうるはしからざりしかば、
(若菜上巻20頁)

とあることよって察せられる。后腹の藤壺の場合は、内親王ということで後宮において尊重されたはずであるが、更衣腹ではそれも不可能だったのであろうか。もちろん尚侍とはいえ朧月夜の存在は強力であり、

大后の、尚侍を参らせたまつりたまひて、かたはらに並ぶ人なくもてなしきこえたまひなどせしほどに、気おされて、帝も御心の中にいとほしきものには思ひきこえさせたまひながら、
(同18頁)

と、後宮で庄倒されていたことも事実であった。これを桐壺帝後宮の再現と見ると、藤壺女御は桐壺更衣と藤壺を合体させたような存在になる。

ここで補完的に登場している藤壺女御の存在は、朱雀帝以上に源氏にとって重要だったのでないだろうか。源氏の密かな藤壺思慕が朱雀帝側に知られていない限り、朱雀院にとっては単なる女三の宮の婿選びでしかなかった。しかしながら源氏にとっては、紫の上に続く「紫のゆかり」として、大きな意味を有することになるからである。加えてゆかりの構想を知る読者

にとつても、女三の宮の降嫁は桐壺帝後宮に入内した若き藤壺の再現と映つたに違いない。

三、女三の宮の降嫁をめぐる

朱雀帝は女三の宮の降嫁をめぐる、

おとなしき御乳母ども召し出でて、御裳着のほどのおたまはするついでに、
(同27頁)

婿候補をあげさせている。⁽⁵⁾乳母以外にもっと相応しい相談相手がいるのでは、と思わないでもないが、養君の結婚に関して乳母の意向も無視できないことは、乳母論の中で既に論じていることである。

ここで朱雀院は、複数・不特定の乳母達に向かって発言している。しかしながら複数の乳母達は決して同じ心(共同体)ではありえず、それぞれが別個に婿候補を選ぶことになる。その結果、乳母の一人が、

この御後見どもの中に、重々しき御乳母のせうと、左中弁なる、かの院に親しき人にて年ごろ仕うまつるありけり。

この宮にも心寄せことにてさぶらへば、参りたるに会ひて
物語するついでに、
(同29頁)

と、兄の左中弁に女三の宮の婿候補として源氏を推挙している。これなど必ずしも乳母達の合意事項ではなく、左中弁の妹の単独行動であろう。たまたま兄の左中弁が源氏の家司だったことで、源氏をターゲットにしているわけである。

この妹の乳母について久保氏は、

その並並ならぬ熱意の源は、養い君に寄せる溺愛の情と、自身の競争心とから、朱雀院が四人の内親王のうち女三の宮だけを偏愛するのを妬む他の姫宮の乳母らに見せつけるためにも、わが養い君には「いかで塵も据ゑたてまつらじ」と力む乳母根性から発している。

と分析しておられる。兄の左中弁にしても、真に源氏のためを思つて動いているかどうかは疑わしい。⁽⁶⁾源氏の腹心の家司であれば、もっと六条院における紫の上の存在を尊重するのではないだろうか。それについては藤本氏が、

弁は紫の上の存在により、「なほいかかと憚らるることありてなんおぼゆる」(24)として、六条院での女三宮の立場に一抹の不安を感じていながらも、それに目を瞑った形で、源氏の高貴な女君を求める気持ちを前面に押し出し、問題をすりかえ、この結婚に賛成するのである。

と分析しておられる。こういった左中弁の安易な割り切りが、結局は六条院の崩壊を招くことになるのではないだろうか。それにしても主役ならぬ端役達が、積極的に物語を動かしていることには留意しておきたい。

この後、妹の乳母は朱雀帝に、

乳母、また事のついでに、「しかじかなむ、なにがしの朝臣にほのめかしはべしかば、かの院にはかならずうけひき申させたまひてむ」
(若菜上巻31頁)

と、いかにも源氏が承諾するであろうことを報告している。こういった乳母の働きかけがどれだけの効力を有しているのか、実のところよくわからない。しかしながらこれが縁で「まづかの弁してぞかつがつ案内伝へきこえさせたまひける」(同39頁)と、左中弁が使者の役に任命されており、任務遂行のため執拗に源氏を口説いている。この場合は、左中弁自身が源氏の家司としての立場を越えているようでもある。いやそれ以上に、ここで完全に受け身に回っている源氏の姿が、かつての主人公像とは大きく変容していることを認めておきたい。

四、女三の宮の降嫁

さて養君が男君の場合、結婚を契機として養君と乳母が分離することは少なくなかった。しかし女君の場合、通い婚は当然として、降嫁に際しても乳母と一緒に付き添っていることは普通であった。女三の宮の場合も、

いといはけなき御ありさまなれば、乳母たち近くさぶらひけり。
(同69頁)

とあるように、六条院へ付き添って引き続き仕えている。

その乳母の報酬は、原則として女三の宮側から出るので、乳母にとって源氏は雇い主ではなかった。また乳母の論理として、利己的に養君たる女三の宮の幸福を最優先させるため、女三の宮を大切に扱わない源氏に対しては、容赦なく皮肉な言葉を浴びせかける。新婚三日目の夜、源氏は紫の上のことが心配になって早く帰ってしまった。それに対して乳母は、「なごりまでとまれる御匂ひ、「聞はあやなし」と独りごたる」(同69頁)と口にしてはいる。これは一見すると教養ある優雅な引歌表現であるが、その裏には暗いうちにさっさと帰ってしまった源氏への非難が込められていた。

また翌日、行けそうもないことを源氏が手紙で告げたところ、今度は「御乳母、「さ聞こえさせはべりぬ」とばかり、言葉に聞こえたり」（同70頁）と、いかにも素っ気ない返事でやはり不満を表出している。ここまで来て、女三の宮の乳母がほとんど特定の呼称では登場していないことに気が付いた。この乳母は、前述の左中弁の乳母であろうか、それとも別の乳母であろうか。

また今も変わらぬ源氏の美しい姿を見た感想として、

心ことにうち化粧じたまへる御ありさま、今見たてまつる女房などは、まして見るかひあり、と思ひきこゆらんかし。

御乳母などやうの老いしらへる人々ぞ、いでや、この御ありさま一とところこそめでたけれ、めざましきことはありなむかし、とうちませて思ふもありけり。（同73頁）

と記されていることも気になる。というのも、婿候補の夕霧を絶讃している若い女房達に対して、かつての源氏の栄光を知る「老いしらへる」女房が、

老いしらへるは、「いで、さりとち、かの院のかばかりにおはせし御ありさまには、えなずらひきこえたまはざめりいと目もあやにこそきよらにものしたまひしか」（同25頁）

と、源氏を最大限に評価していたからである。それに対して「乳母などやうの老いしらへる人々」は、かえって不安を表出しているのではないか。もちろん「めざましきことはありなむかし」という不安は、源氏的美貌を高く評価していることの裏返しであろうが、それでも無条件に源氏を讚美してはならず、源氏の絶対性には既に翳りが見えていることになる（久保氏はこれを「乳母の果たした浸食作用」と解しておられる）。この「老いしらへる」乳母は一体誰であろうか。どうも女三の宮の乳母は、実名表記される場合はかえって重要性を付与されていないように思える。

さて紫の上と女三の宮が初めて対面する際、紫の上は「中納言の乳母といふ召し出でて」（同91頁）いろいろと語り合っている。ここに呼称を冠して登場している「中納言の乳母」は、実はここが初出なので素性なども不確かなのであるが、紫の上があえて中納言の乳母を指名したのは、彼女が第一乳母だったからであろうか。それとも女三の宮の乳母の中で、懐柔可能な存在だったからであろうか。もしそうなら、中納言の乳母と左中弁の妹は別人（対立的存在）とすべきであろう。いずれにせよこれ以降、紫の上と女三宮は、恐らくこの中納言の乳母を介

して手紙のやりとりなどを行っていると思われる。ここで役割が固定されたためか、この後中納言の乳母が具体的に登場することは二度となかった。

若菜下巻に至って六条院では女樂が行われるが、それについての乳母の感想は一切記されていない。その後、紫の上が発病して療養のために二条院へ移ると、六条院は火の消えたような静けさとなってしまふ。それに対応して、中納言の乳母と入れ替わるように侍従の乳母が登場する。

小侍従といふかたらひ人は、宮の御侍従の乳母のむすめなりけり。
(若菜下巻217頁)

ここでは乳母子の小侍従の紹介のために、便宜的にその母として紹介されているにすぎない。つまり侍従の乳母本人は、物語においては不在なのである。⁽⁸⁾

五、女三の宮の乳母の謎

さてこれまで述べてきたように、女三の宮の乳母としてはっきり名前が出ているのは、

- 1 左中弁の妹（若菜上巻）
- 2 中納言の乳母（若菜上巻）

女三の宮の乳母をめぐって

3 侍従の乳母（若菜下巻）

4 小侍従（乳主）（若菜上下巻・柏木巻・橋姫巻）

の乳母三人・乳主一人であった（もつと乳母子がいてもいいはず）。この中では、最初に源氏を婿候補として推薦した左中弁の妹の位置付けがややこしい。『源氏物語事典』下巻「をんなさんのみや（三）のめのと」項では「左中弁の妹は侍従の乳母か」としており、また「さちゅうべん（四）」項では「女三の宮（三）の乳母へ中納言の乳母か、侍従の乳母か」の兄」と疑問視しているが、久保氏は、

女三の宮には侍従と中納言とのほかにも乳母がいて、それが「左中弁妹」である場合も考えられるのではなからうか。と明解に二人を別人として考えておられる。確かに女三の宮のような高貴な内親王であれば、三人以上の乳母が支給されるのは普通であった。

ではその乳母を誰が選んだのかとなると、久保氏は「朱雀院が心をこめて人選した女性」としておられる。確かに源氏も明石姫君の乳母を選定しているので、父方が選ぶことに異議はない。ただし天皇が自ら乳母を選ぶとは思えない。この場合は母方が人選し、その報酬も賄っていると考えるのが妥当ではな

いだろうか（紫の上の少納言の乳母がその好例であろう）。父である朱雀院が選んだ乳母ではないからこそ、このように乳母自身の利害が表出しているのではないだろうか。

むしろ乳母の論理としては、複数の乳母の間にはそれぞれの愛情や利害による利己的な対立が生じる恐れがあり、決して一枚岩ではありえないことを強調しておきたい。つまり三人の乳母がいれば、その三人がそれぞれ女三の宮の幸福と自分の利害を重ねて、別個に個人プレーに走る恐れがあるのである。なお左中弁の妹であれば、通例では「弁の乳母」と称されてもいいはずである。彼女は兄が源氏の家司であることから、この結婚にはその成就による兄の利害も大きく絡んでいるはずであるが（ここにさらに乳母の夫が登場することも少なくない）、この働きによってどのような報償を得たのかは描かれていない。

二人目の中納言の乳母は、仮に親族が中納言であれば、乳母としてはかなり身分が高いことになる（筆頭乳母の可能性もある）。それはさておき、中納言の乳母は女三の宮の婿選びでは遅れをとったわけである。しかし前述のように紫の上と結び付くことによって、六条院における確固とした存在意義を獲得しているのではないだろうか。そうなると三人目の侍従の乳母の

役割だけが不明瞭ということになる。単純に小侍従が柏木に籠絡されていることから、その母も柏木寄りだと見ることもできる⁹⁾。

そういった読みも一利あるが、乳母の論理としては乳母間の対立のみならず、乳母と乳母子の対立が問題となってくる。つまり侍従の乳母と小侍従は、親子だからといって一心同体であるとは限らないのである。その意味では侍従の乳母と左中弁の妹が同一人物であっても矛盾はない。もし侍従の乳母が女三の宮の側近くで常に目を光らせていたとすれば、たとえ源氏に対して不満をぶつけていたとしても、密通の手助けをすることは決してあるまい。そうなると密通事件は、三人の乳母が不在（その理由不明）の間隙をぬって挙行されたことになる。

その場合、乳母子の小侍従では乳母の代役が務められないばかりか、むしろ進んで柏木を導く役割を果たしてしまっている（浮舟の乳母・乳母子も同様）。それもこれもすべては乳母の論理の上に成立していることができる。源氏にしても、明石姫君の乳母選びで乳母の重要性を十分認識しているはずであるから、紫の上の発病（看病のための不在）さえなければ、密通は不可能だったはずである。

六、柏木との密通をめぐって

女三の宮の婿候補の一人であった柏木は、女三の宮が降嫁した後も、

そのをりより語らひつきにける女房のたよりに、御ありさまなども聞き伝ふるを慰めに思ふぞ、はかなかりける。

(若菜上巻136頁)

と、小侍従から情報を得ていた。女三の宮が六条院で紫の上に圧倒されているという噂を聞くにつけ、「常にこの小侍従といふ御乳主をも、言ひはげまして」(同136頁) 諦めきれずにいたのである。なおここに見える「乳主」とはかなり珍しい語で、『源氏物語』にも一例しか用例が認められない。結論として私は、女三の宮と同年齢のもっとも信頼されている乳母子と定義している⁽¹⁰⁾。乳母が複数いるのだから、乳母子も複数いておかしくあるまい。しかしながら女三の宮の乳母子は、何故か特殊な乳主たる小侍従だけしか登場していないのである。

六条院で行われた蹴鞠の日に、偶然御簾の隙間から女三の宮の立ち姿を見てから、柏木はますます恋心を募らせ、「小侍従が例の文やりたまふ」(同148頁) と手紙を送っている。ここ

女三の宮の乳母をめぐって

に「例の」とあるのは、小侍従の返事にある「ひき忍びて例の書く」(同149頁) と対応しており、これによって二人の文通が初回でなかったことが明示されている。ある女性との恋を成就させたければ、信頼できる仲介役を味方にするのが一番である。その仲介役としてもっとも相応しいのが乳母子であった。場合によっては乳母子を籠絡させるために、肉体関係さえ持つこともあったようである。⁽¹¹⁾

二人の関係は未詳だが、「小侍従を迎へとりつつ」とあることで、小侍従は柏木の邸にも出入りしていることがわかる。その延長線上で柏木は、

院の上だに、かくあまたにかけかけしくて、人に圧されたまふやうにて、独り大殿籠る夜な夜な多く、つれづれにて過ぐしたまふなりなど、人の羨しけるついでにも、すこし悔い思したる御気色にて、
(若菜下巻218頁)

といった噂話もしている。久保氏はこの噂の発信源を女三の宮の乳母達―特に左中弁の妹と考えておられるようである。ただし左中弁の妹は源氏を婿に推挙した張本人であるから、女三の宮の不遇を朱雀院の耳に入れることは、自らの失態を暴露することになるのではないだろうか。むしろこの役は、婿選びで後

れをとった侍従の乳母の方が相応しいかもしれない。

さて、密通事件成就のために、便宜的に物語の舞台から遠ざけられていた乳母であるが、さすがに女三の宮の異常（懷妊）には、

御乳母たち見たてまつり咎めて、院の渡らせたまふことも

いとたまさかなるをつぶやき恨みたてまつる。（同244頁）

と真つ先に気付いて、源氏に報告している。これなどはまさに乳母の役割であろう。また薫誕生後に源氏に向かつて、

老いしらへる人などは、「いでや、おろそかにもおはしますかな。めづらしうさし出でたまへる御ありさまの、かばかりゆゆしきまでにおはしますを」（同301頁）

と悪口を言う「老いしらへる人」は、乳母と考えてもいいかもしれない。

ただし女三の宮の出家に際しては、女三の宮自身、乳母に一切相談をしておらず、そのため出家場面には姿を見せていない。かろうじて持仏開眼供養の折に、

御弟子に慕ひここえたる尼ども、御乳母、古人どもはさるものにて、若き盛りのものも、心定まり、さる方にて世を尽くしつべきかぎりは、選りてなんなさせたまひける。

（鈴虫巻380頁）

と、尼になる代表として出ている。女三の宮の降嫁に際して一緒に付いてきた乳母達であるから、たとえ相談もなく女三の宮が出家をしたとしても、それに付き合つて尼になるのが乳母の論理であつたことがわかる。

七、井の尼の役割

さて小侍従の紹介において、看過できない重要なことが語られていた。重複を恐れず、もう一度本文を引用してみたい。

小侍従といふかたらひ人は、宮の御侍従の乳母のむすめなりけり。その乳母の姉ぞ、かの督の君の御乳母なりければ、早くよりけ近く聞きたてまつりて、まだ宮幼くおはしましし時より、いとよらになむおはします、帝のかしづきたてまつりたまふさまなど、聞きおきたてまつりて、かかる思ひもつきそめたるなりけり。（若菜下巻218頁）

ここで注目すべきは、女三の宮の侍従の乳母と柏木の乳母が姉妹であつたと語られている点である。『源氏物語』に登場している多くの乳母の中で、姉妹別々に乳母になっている例は他に見当たらない。女三の宮の乳母を選定する際、姉が柏木の乳

母であったことはまったく問題にならなかったであろうか。また本来ならば、たとえ姉妹であろうとも主人筋の秘密は漏らすべきではないのだが、どうも乳母同士のネットワークでは、逆にそれぞれの情報を交換・共有することもあったらしい。もしそうならば柏木は、乳母を通じて女三の宮の情報を仕入れていたことが、密通に至る伏線となっていたことになる。たとえばその情報が主観的なもので、柏木が幻想を抱かされていたとしても。つまり密通は小侍従の仲介のみならず、婿選び以前にその種が蒔かれていたことになる。

そして興味深いことに、橋姫巻で登場する弁の尼は、かの故権大納言の御乳母にはべりしは、弁が母になんはべりし。
(橋姫巻146頁)

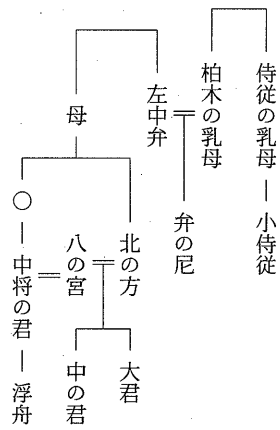
と柏木の乳母子という設定になっている。乳母の系譜に接続することで、薫の出生の秘密を知りうる人物として、弁が設定されているのである。小侍従と弁は従姉妹同士になるが、しかし薫出生の秘密は小侍従から弁に伝えられたものではなかった。その情報は、

今は限りになりたまひにし御病の末つ方に召し寄せて、いささかのたまひおくことなんはべりしを、
(同)

女三の宮の乳母をめぐる

と、臨終間近の柏木から直接弁に伝えられたのである(乳母子同士のコミュニケーションについては、あらためて考えてみたい)。

ではその弁の尼が、何故都合良く宇治の八の宮邸にいるかといえ、実は八の宮の北の方の母親と弁の父親が兄弟(北の方と弁は従姉妹)ということ、血縁で八の宮一族と結び付いていたのである(系図参照)。弁の尼に関しては乳母子であることのみならず、親戚の女房でもあるという複雑な系譜の二重構造になっており、それが続編の物語展開の鍵となっていることには留意しておきたい。この血縁は、中將の君が八の宮の北の方の姪であることから、浮舟との関係までも可能にしているのである。



結

以上、女三の宮の乳母・乳母子を乳母論として分析してきたわけだが、複数の乳母達はそれぞれ別個の役割を担っていることが明らかにになった。まず左中弁の妹は、女三の宮の婿選びに活躍しており、中納言の乳母は紫の上とのパイプ役を勤めている。侍従の乳母は名前だけで実体は不在であるが、それに代わって娘の小侍従（乳主）が柏木との密通事件で手引き役を勤めており、乳母同士の対立のみならず、乳母と乳母子の対立構造も存在していることが明らかになった。

こういった乳母の動きは、必ずしも女三の宮の乳母が特殊だというのではなく、一般的な乳母の論理の中で説明できるものである。最も特徴的なことは、女三の宮の侍従の乳母と柏木の乳母が姉妹であった点であり、そこから柏木に女三の宮の情報が入ったこと、また続編において柏木の乳母子の弁が、薫に出生の秘密を知らせるといった長期的な構想が認められる点である。

女三の宮の乳母達も、乳母の論理の上でそれぞれに養君と利己的に結び付いており、それが結果的に源氏の構築した六条院

世界の秩序を侵犯することになっていくといえよう。女三の宮の降嫁は、それに付随する乳母・乳母子の動向と合わせて考察することで、「紫のゆかり」構想とは異なる世界がほの見えてくるのである。

〔注〕

(1) 吉海『平安朝の乳母達―『源氏物語』への階梯―』（世界思想社）平成7年。

(2) 久保重氏「朱雀院女三の宮の乳母たち」榊蔭国文学26・平成元年3月（後に『源氏物語の探求十五』風間書房・平成2年に所収）。

(3) 藤本勝義氏「女三の宮の乳母と兄・左中弁」『源氏物語の想像力』（立間書院）平成6年。

(4) ただし藤壺女御が朱雀帝に入内したことは周知の事実であるから、源氏がそのことを「この皇女の御母女御こそは、かの宮の御はらからにものしたまひけめ」（若菜上巻41頁）とあらためて口に行っているのは奇妙である。もともと紫のゆかりの構想は、必ずしも先帝の血縁者すべてに及ぶものではなく、あくまで藤壺と紫の上の二人だけに限ったことだったのでないだろうか。

(5) 本来ならば、源氏の最も信頼すべき家司として、第一部で献身的な活躍をしている惟光や良清が再登場してもよきさそうであるが、彼らは既にその役割を終了しているらしい。その意味で左中弁は、必ずしも源氏の信頼できる古くからの家司と断言できそうもない。吉海「惟光の活躍」『源氏物語の新考察—人物と表現の虚実—』(おうふう) 平成15年参照。

(6) 女三の宮の婿選びは、しばしば何かの「ついで」に語られている。この場合の「ついで」は決して軽いものではなく、むしろ物語の方法として機能していると読みたい。

(7) 久保氏は注(2) 論文で、「「めざまし」という語は、女三の宮の婿選びについて評議した際に、朱雀院と乳母たちとの間で何度も口に乗っていた」と述べておられる。なるほど、

・あまたの中にかがづらひて、めざましかるべき思ひはありとも
(若菜上巻28頁)

・人の飽かぬことにははべめるを、めざましきこともやはべらん
(同32頁)

・女は男に見ゆるにつけてこそ、悔しげなることも、めざましき思ひもおのづからうちまじるわざなめれど
(同33頁)

・さやうにおしなべたる際は、なほめざましくなむあるべき
(同35頁)

などとしばしば用いられている。かつての桐壺帝後宮では、桐壺更衣が他の女御達から「めざましきもの」とされてきた。

女三の宮の乳母をめぐる

また紫の上は明石の君を「めざまし」と思っていた。その紫の上が今度は女三の宮側から「めざまし」き存在とされているのである。「めざまし」は、身分制社会における人間関係の位置付けを知るキーワードと考えられる。

(8) 女三の宮の懐妊に際して、「侍従ぞ、かかるにつけても胸うち騒ぎける」(若菜下巻27頁)とある。この「侍従」は「侍従の乳母」ではなく明らかに「小侍従」のことである。侍従の乳母の不在によって、もはや両者を区別する必要もなくなったのであろう。

(9) そうなると乳母達全員が源氏を婿として推挙したと読むよりも、左中弁の妹以外は、それぞれ別の婿候補を押しした可能性がある。なお女三の宮の婿候補としては、源氏以外に夕霧(中納言)・柏木(右衛門督)・螢兵部卿宮・藤大納言などの名があがっている。

(10) 吉海「乳主考」『平安朝の乳母達—『源氏物語』への階梯—』(世界思想社) 平成7年。

(11) 「語らひつき」「語らひ人」とあるのはそのことを匂わせている。なお「そのおり」とある点、婿選び以前から小侍従と親密であったわけではなさそうである。

(12) 吉海「親類の女房」『源氏物語の新考察—人物と表現の虚実—』(おうふう) 平成15年。